

堀部 正円 学位（博士）請求論文審査報告書
論文題目：近世刊本『録内御書』の書誌学的研究

日蓮（1222—1282）の著作や書状などの遺文（御書）は、はやくより集成が行われてきた。まず『録内御書』が成立し、次いで『録内御書』に漏れた遺文を収録する『録外御書』が成立する。『録内御書』『録外御書』は祖師日蓮の書として、日蓮教団の聖教における根本に位置付けられる。なかでも『録内御書』は、日蓮の一周忌に編纂されたと伝承され、基準となるべき遺文として尊重されることになる。中世においては、『録内御書』『録外御書』は専ら写本によって伝えられたが、近世に入ると相継いで刊本として出版され、広く用いられた。

近世の刊本『録内御書』については、遺文編纂の歴史上に位置付けられ、近世の日寛『祖書編輯考』や日明『祖書目次』の記述により諸版の存在について言及されてきた。近年に至り、記録のみで知られていた古活字版が冠賢一氏により発見され、次いでその一種が整版の底本となったことが明らかにされた。しかしながら、古活字版及び整版の諸版における特徴や、諸版間における相互関係などについては、十分に解明されているとは言いがたい状況がある。そこで論者は、書誌学における形態書誌学（図書の外形を調べること）と校勘学（本文を比べ勘がえること）の手法を導入し、刊本『録内御書』（目録を含め 41 巻、約 1700 丁）の諸版について、各所に所蔵される伝本を精査し、比較検討を行った。

本論文は、序論三章、本論第一部三章、第二部四章、第三部二章、結論から構成されている。

序論では、日蓮遺文並びに刊本『録内御書』に関する研究史、並びに書誌学研究の現状を概観する。その上で、問題の所在を明らかにするとともに、本論の研究方法を明示する。

本論第一部は「『録内御書』について」と題し、『録内御書』に関する諸視点と刊本『録内御書』の概要を検討する。

第一章「『録内御書』の成立」では、『録内御書』成立の時期や場所などに言及した先行研究を概観する。その上で、最新の説である日什門流成立説について、確定的とまではいえないが注目すべき説であることを述べる。

第二章「『録内御書』の写本」では、中世から近世初頭における『録内御書』の写本について、書写の意義や書写目的を検討する。単独で伝来する写本については、セット本全冊の写本の端本なのか否かを検討する必要性について指摘する。

第三章「刊本『録内御書』各本の概説と収録御書」では、近世に出版された古活字版及び整版の『録内御書』の諸版について、版式の特徴と相違、収録される御書の相違を明らかにする。

第二部では「形態書誌学から見た刊本『録内御書』」と題し、形態書誌学の立場より各

版の特徴を解明する。

第一章「古活字版『録内御書』の研究」では、古活字版A本、A'本、B本の三種について、活字や版式の相違などを、書誌を提示しながら各本の特徴を明らかにする。また、日蓮教団関係書籍の古活字版の出版状況を検討し、出版場所については、B本はこれまで本国寺出版説があったが、法忍寺妙義文庫に所蔵する古活字版から発見された刷り破れなどをもとに、その可能性が高いことを指摘する。一方、A種本については、本国寺版、寺院版であるという説もあるが、書肆による古活字版の出版も確認され、従来説は必ずしも十全では無いことを指摘する。

第二章「整版『録内御書』の研究」では、寛永十九年版系と寛永二十年版系の出版事情や特徴などを明らかにする。寛永十九年版系では、その基点となる寛永十九年版が、従来は寛永十九年（1642）より以前に出版されていたのではないかと考えられていたことに対して、同説の根拠とされた立正大学図書館に所蔵する寛永十九年版が刊記欠落本である可能性が高いことを明らかにした上で、寛永十九年に出版されたと推定する。また、寛永十九年版には、同版の版式を使用し修訂を加えた覆刻版が存在することを新たに見出している。同版を「覆寛永十九年版」と称し、確認できた二十一巻二十五冊のうち、都合十三巻十五冊を取り上げ、その特徴として寛永十九年版の版式を使用しているが寛永十九年版の板木とは相違すること、白文体の御書は一部を除き、送り仮名、返り点が付されていること、潰れた文字が散見されることなどを明らかにする。

寛永二十年版系では、寛永二十年版の特徴としての註記や送り仮名・返り点のこと、書肆・庄右衛門のことをはじめ、寛文九年版との相違について述べている。また、修補版を謳う宝暦六年版では、「月支」と表記することや、巻二十三の目録のことなど、いくつかの特徴的な部分を取り上げて説明する。さらに、寛永二十年より近代初頭まで刷られた同系は、版面の対照によって一部に改刻された形跡が窺えることを指摘し、恐らく宝暦六年版の際に改刻されたのではないかという推測を提示している。

第三章「取り合わせ本から見た刊本『録内御書』」では、東洋文庫及び法忍寺妙義文庫の二例に基づき、各本の書誌を参考にしながら、刊本『録内御書』に接する上で注意すべき問題点を明らかにしている。すなわち、全冊揃いの本であっても、諸版が入り交じっている東洋文庫所蔵本、また諸版が入り交じっているのみならず、一冊の本の中にも諸版が混在した妙義文庫所蔵本について、それぞれ版の特定を行いながら、取り合わせ本を見抜く必要性、とりわけ原裝と改装の相違を見抜く必要性を述べている。

第四章「書き入れから見た刊本『録内御書』」では、刊本『録内御書』に書き入れがしばしば見られる点について、各所に所蔵される諸本を紹介し、その内容を明らかにしている。正本の所在や、真蹟との校合、中世の写本に関する情報などの事例を見出している。また、真言宗寺院に所蔵される刊本の事例から、書き入れが書籍の利用のされ方を反映することを想定している。

第三部では「校勘学から見た刊本『録内御書』」と題し、校勘学の視座より刊本『録内御書』に収録された御書の諸版をはじめ、真蹟や写本、近代の遺文集などとも校合を行い、収録された本文の同異を明らかにする。

第一章「本文異同にみる刊本『録内御書』諸版の特徴」では、古活字版三種における本文異同を確認し、A'本、B本に表記の近似性が見られることを明らかにする。さらに、古活字版と写本とを校合し、B本が本満寺本に近似することを明らかにする。一方、A本は独特な表記を持つが、写本では本法寺本に比較的近似することを明らかにする。ただし、B本と本満寺本ほどの近似性はないため、さらに多くの写本と校合する必要性を指摘している。

整版である寛永十九年版と寛永二十年版は、ともに古活字版 A'本を版下作成の底本としているが、それぞれが独自の対校本を底本として校合し、古活字版 A'本から本文を変更させている実態を明らかにする。寛永二十年版には、二十四編の真蹟及び真蹟対校本と校合したと表記されているが、卷二十二の『聖人御難事』のようにかなり真蹟に近似する表記に修正された事例がある反面、卷八の『観心本尊抄』では底本の古活字版 A'本から大きな変更を加えた結果、真蹟から乖離してしまった実態も確認される。さらに、版面や丁数などの形態的視点より寛永両版の相違が見抜ける場合があることや、寛永二十年版と宝暦六年版の各巻における相違の実態を明らかにする。また、新たに発見した覆寛永十九年版では、寛永十九年版の表記から寛永二十年版の表記に近づけるための修補を行っている実態を、具体的に明らかにしている。

第二章「『録内御書』の注釈書の特徴と異本表記」では、円智日性『御書註』と久成日相『御書和語式』の二つの注釈書を取り上げ、注釈書としての特徴を明らかにした上で、『録内御書』の異本表記について検討を加える。『御書註』は、通仏教的な姿勢で、用語解説はあくまでも経論を重視し、日蓮教学的解釈が一切見られない。これは、日性編『倭漢合運』や『柿葉』とも共通しており、日性の特徴とも言うべきものである。『御書註』における『立正安国論』部分を記した承慧日修の注釈と比較しても、日性の注釈態度は日蓮教学的視点とは明らかに異なったものである。また、日性の表記と古活字版の表記を対照し、近似性が見られないことも明らかにしている。

『御書和語式』は、真蹟表記を重視する日相の対応や、多くの異本註記を述べた様子を『立正安国論』の対照などを通じて、詳細な分析を行っている。日相は、冒頭の「凡例」に述べているように、慶長の百部刷り本に多大な信頼を寄せている。本書には数多くの異本表記があり、『録内御書』の諸本研究の上で貴重な資料となりうることを明らかにしている。

結論では、本論全体をまとめるとともに、研究課題を提示している。『録内御書』の全巻にわたり本文異同を検討する必要性や、『録内御書』と並ぶ遺文集である『録外御書』の書誌学的検討などが提示される。さらに、遺文集にとどまらず日蓮教団関係書籍全般の

書誌学的研究や、未だ手つかずとなっているものが多い仏教書の書誌学的研究が必要であることを述べる。

以上、本論文は、刊本『録内御書』について、書誌学の研究手法を基本に置き、それぞれの課題に従って検証していることが確認できる。特に寛永十九年版の覆刻版を見出したことは、従来の遺文編纂史に新たな知見を加えるもので貴重な成果である。また、諸版について、それぞれの版面や本文の特徴を明確にし、従来の見解を一步進めた。このことは、所々に伝わる刊本の判別を進める上での基準を提示したことになる。これらは、論者の確かな調査方法に裏付けられた、諸本の精査を基礎としている。

以上のことから、本研究は、今後の日蓮教団における刊本の書誌学的研究のみならず、日蓮教団史研究に大いに寄与するものであると評価できる。

なお、本論文の審査に際しては、文学研究科の内規により、平成29年1月20日に公聴口頭試問をおこない、論者の向学とその力量の確実なることを確認した。

よって、本論文は博士（文学）の学位を授与するに相応しいと審査委員会は判断し、これを認定する。

平成29年2月1日

主査 立正大学大学院文学研究科仏教学専攻
教授 寺尾 英智

副査 立正大学大学院文学研究科仏教学専攻
教授 庵谷 行亨

副査 中央大学大学院文学研究科国文学専攻
教授 鈴木 俊幸